

救う会 若手中心に継続

拉致被害者らの支援団体

北朝鮮による拉致被害者とその家族を支援する市民団体「救う会・群馬」が設立から間もなく14年になる。会を運営してきた代表の大野トシ江さん(83)と事務局長の敏雄さん(80)の夫妻は、高齢を理由に一度は解散しようと思っていたが、若手メンバーが中心となり、新体制で継続することになった。1、2日、前橋市内で毎年恒例の署名・募金活動に臨んだ。



署名・募金活動に臨む「救う会・群馬」のメンバーら＝前橋市亀里町



「救う会・群馬」代表の大野トシ江さん(右)と事務局長の敏雄さん(左)夫妻＝前橋市三俣町

「署名をお願いします」前橋市亀里町のJAビル駐車場で開かれた「収獲感謝祭」に、救う会メンバーの声が響いた。会は毎年このイベントで署名や募金活動をしてきたが、今年は参加が危ぶまれていた。同会は2002年12月、大野さん夫妻の呼びかけで設立した。拉致被害者の横田めぐみさんの両親、滋さん(83)と早紀江さん(80)が1988年から3年余り、転勤で前橋市内に暮らして

いた時に知り合ったのがきっかけだ。これまで集めた署名は累計で7万3千人、募金総額は1900万円に上る。ただ、260人の会員も高齢化が進み、近年は退会者も出ていた。大野夫妻もそれぞれ病気を抱え、「拉致問題の進展も見られない中、体力的な限界を感じていた」(敏雄さん)。今年7月には解散することを決め、横田早紀江さんにも伝えていた。

一部のメンバーにもその話を伝えると、8月に開いた会議で若手会員から「私たちに任せてください」との声が上がったという。夫妻を含め5人いた幹事のうち2人が引退し、新たに30、60代の7人が加わった。夫妻は役職に就いたままの形だが、一線からは退き、実質的な活動は8人の幹事で進めることになった。

新幹事の一人、事務局代理の両宮留香さん(53)＝前橋市＝は「このまま拉致問題を風化させてはいけないと思った」。最年少幹事の安本裕幸さん(36)＝同＝は「メンバーが少なくなっていると感じ、力になりたい」と思った」と話す。

トシ江さんは「予想していなかったことで本当にありがたい」。敏雄さんも「実務は任せて、できることで今後も支えていきたい」と表情を和らげた。

1、2日の活動では、計約1600人の署名が集まったという。同会への問い合わせは事務局(027・243・4237)へ。

(藤田太郎)